

堀直虎没後150周年・明治150年記念事業



語りと箏・尺八による堀直虎の生涯

こと しゃくはち

ほりなおとら



## 幕末・堀直虎 年譜

1836	天保7年	8月16日	直虎、江戸亀井戸下屋敷に生まれる
1845	弘化2年	2月21日	父直格依願隠居 兄直武が藩主となる
1853	嘉永6年	6月3日	アメリカ海軍蒸気船(黒船)、浦賀沖に来航
1854	嘉永7年	3月3日	日米和親条約締結…鎖国体制の終焉
1856	安政3年	2月	直虎、兄直武の養子になる
1858	安政5年	6月19日	日米修好通商条約締結 安政の大獄…幕府が反対派を弾圧(～安政6)
1860	安政7年	3月3日	桜田門外の変…大老井伊直弼が暗殺される
1861	文久元年	11月6日 12月16日 12月	兄直武依願隠居 直虎、藩主となる 直虎、従五位下長門守に任じられる 民蔵の直訴 ～ 国家老一派に切腹を命じる
1862	文久2年	8月7日	直虎、内蔵頭に任じられる 兄直武亡くなる
1863	文久3年	9月	直虎、大番頭となる 下関戦争(～文久4)、薩英戦争
1864	文久4年 元治元年	2月 7月8日 7月11日	直虎、上田藩松平忠固の娘俊と結婚 池田屋事件…新撰組が長州藩などの志士を襲撃 佐久間象山、京都で暗殺される 第一次長州征伐…幕府が長州征討のため出兵
1866	慶応2年	1月21日 6月 12月5日	薩長同盟 第二次長州征伐…慶応3年1月幕府軍実質敗北 徳川慶喜が15代将軍となる
1867	慶応3年	9月3日 10月14日 12月5日 12月9日	赤松小三郎、京都で暗殺される 大政奉還…徳川慶喜が政権を朝廷に返上 直虎、若年寄兼外国惣奉行に命じられる 王政復古の大本令…幕府廃絶新政府樹立宣言
1868	慶応4年	1月3日 1月6日 1月14日 1月17日 4月11日 5月 9月8日	鳥羽・伏見の戦い(戊辰戦争緒戦) 徳川慶喜、大坂城を密かに脱出 山内豊福夫妻自害する 直虎、江戸城にて自害する 江戸城無血開城 直虎の弟直明の家督相続が認められる 明治改元…慶応4年を明治元年とする
1869	明治2年	5月18日	戊辰戦争終結



須坂藩  
13代藩主  
堀直虎

ほり  
なおとら

幕末の混乱期、「義」に生きて若き藩主

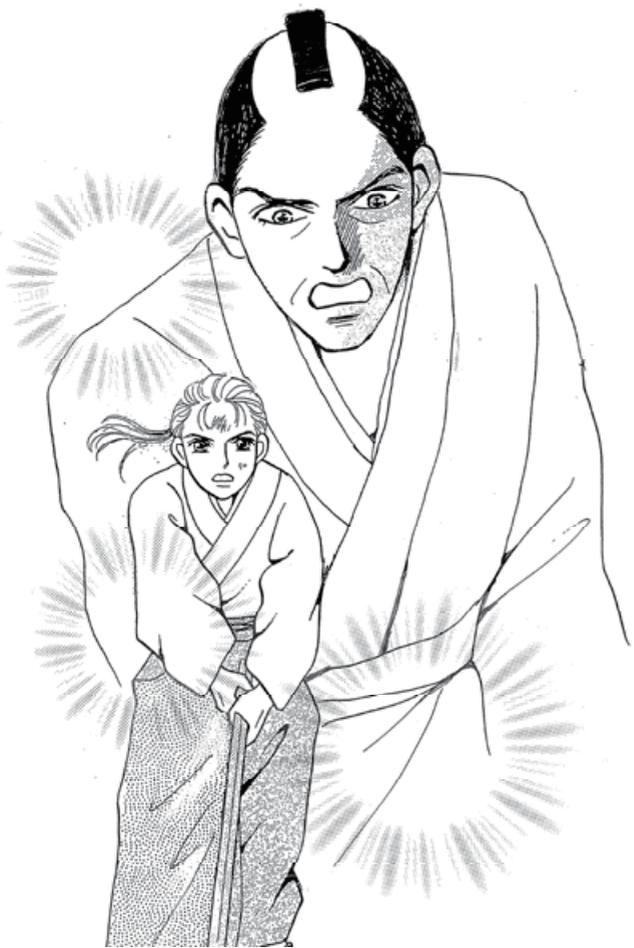
## 須坂藩

立藩～廃藩	元和元年(1615)～明治4年(1871)
立藩石高	1万2053石(廃藩時1万53石)
所領地	高井郡13ヵ村(須坂・綿内・灰野・野辺・八重村・高梨・坂田・塩川・沼目・小島・小山・日滝・五閑)
家紋	亀甲に万字
居城	須坂館(陣屋) ※跡地は奥田神社(須坂市常磐町)となる

須坂藩は堀直重に始まり、信州高井郡須坂の地一万五千石を所領とする小大名。直虎は、この須坂藩十一代藩主堀直格の五男として誕生しました。直虎は文武両道に優れ、幼い頃から武道ばかりでなく、書や学問が大好きな子どもで、中国の孔子の教えをそらんじているほどでした。中でも「仁・義・礼・智・信」の五つの徳目を示した「五常」の教えは、直虎の心に深く刻まれ、その中でも「義」こそが大切と考えていました。「義」は「人の道」であり、人の行動と心を正しく導く道理である、と直虎は考えていたのです。

須坂藩下屋敷には、父直格が、見事に咲く姿、潔く散る姿を好んで植えた、たくさんの桜の木がありました。その桜の木のもと、剣術の稽古に励む直虎に、父直格はこう語って聞かせるのでした。

直格 「直虎よ、戦は剣のみにあらず…。剣は武士の魂、振るう時はこの桜のように命も散ろう。それも美しいが、剣を振るわず役立つ事が一番なのだ。その為に心と体を鍛えること、すなわちそれが真の武道なのだ。」



嘉永六年・一八五三年、直虎十八歳の年。江戸幕府をゆるがす大事件が起こります。黒船来航。ペリー率いるアメリカ艦隊が現れ、鎖国中の日本に開国を迫ったのです。



「ドン、ドオオン、ゴオオン」

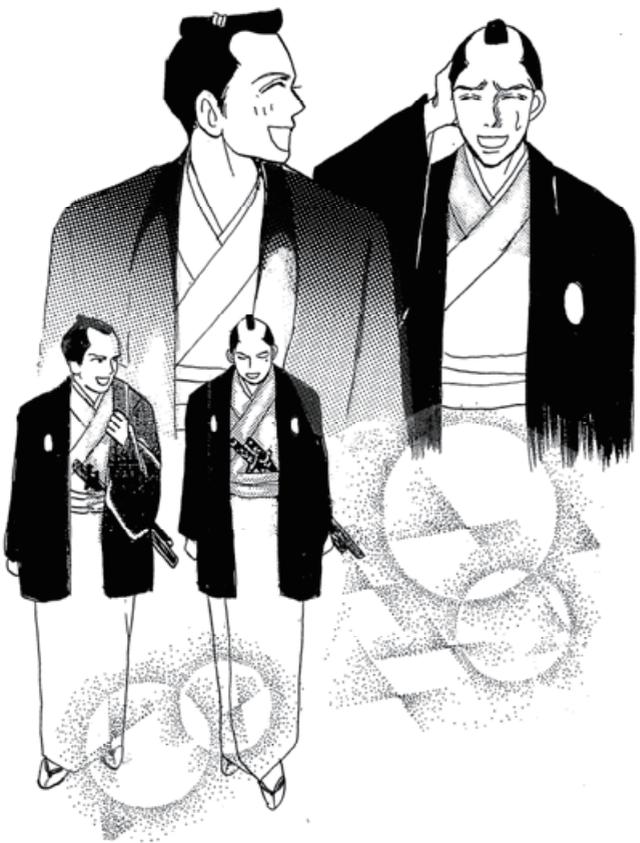
兵士「なんだこの爆音は、耳が裂ける！」

まるで「この世の終わり」を告げるかのような黒船の砲音でした。

この黒船来航以来、世の中は激しく揺れ、幕府と朝廷が開国をめぐり対立。開国反対の朝廷側を支持し、外国船を攻撃した長州藩と薩摩藩は、どちらもその強大な軍事力の前に敗北を喫してしまいます。

国家存続の危機、やがて嵐がやって来るであろうという、この暗雲たれこめる時期。まさに幕末の混乱期を前に、直虎は兄直武の隠居により、二十六歳にして須坂藩堀家十三代藩主になるのです。

藩主となった直虎には、江戸城で生涯の友が出来ました。土佐、山内家、新田藩の山内豊福とよよしです。同じ歳、同じく小藩の藩主であり、同じ境遇きょうぐうに育ち、そして同じ志を持つ武士であることを、共に理解しあえる無二むにの友となりました。



豊福「今のままでは、とても諸外国に太刀打ちたちうちできるとは思えない。まずは軍制改革。武器の洋式化ようしきが必要だ。」

直虎「まったくその通り！ 私も軍制改革を考えてはいるが、その前に財政改革だ。これが難儀なんぎで…」

幕末期、全国諸藩の藩財政はいずれも多かれ少なかれ財政難にみまわれており、須坂藩も例にもれず、その財政は大変苦しいものでありました。

直虎「民の為にも早急に何とかしたいが…この状況では身を切るような財政改革が必要になるかもしれない…」

直虎が堀家の家督を継ぎ、一ヶ月後の十二月、師走の凍てつく風が吹く中のこと。

民蔵「堀直虎様の御駕籠と存じます！恐れながらお願いがございます！このままでは我々は死ぬしかありません！」

須坂の百姓・民蔵による直訴でした。

この時代、どんな理由があっても、直訴はその場で斬られても仕方のないこと。しかし、直虎はその直訴状を受け取り、そればかりか民蔵に食事を取らせ、路銀を渡し放免。

直訴の内容は、須坂藩内に横行する賄賂政治でした。直虎は早速、信頼する家臣・小林要右衛門に、須坂に行つて隠密・迅速に調査をするよう指示。

十日後、江戸に戻つた要右衛門からの報告書には、見過ごせない内容が書かれていました。



信頼していた国家老一派により、賄賂や横領、高利貸し。重い税を課すとともに、御用金の金額に応じた役人登用の乱発など、民を苦しめる政治が行われていたのです。

直虎「国家老一派を厳罰に処す。ただし、すぐに処刑してはならぬ。罪の重さを十分に思い知らせるのだ！」

すぐさま国家老一派は捉えられ公開処刑の場へ。

しかし、今まさに処刑となるその時、僧侶から袈裟が投げ掛けられ、処刑は留められることとなりました。

これは直虎の計らいと思われ、命を重んじる直虎が、罪人に正しい道を諭す為に対処したものでした。



この国家老一派の処罰により、財政改革を前進させた直虎は、続いて軍制改革に着手。松代藩真田家の家臣、佐久間象山を招き助言を仰ぎました。

象山「異国の船に対し備えが必要である。西洋式の大砲を鑄造するとともに、西洋から兵学や砲学を取り入れるべきである」

また、上田藩松平家の兵学者・赤松小三郎の、兵器の改良・洋式化を勧める助言を受け、直虎はこの二人の教えにより洋式軍隊を実現させていきます。

元治元年・一八六四年、上田藩の赤松小三郎との縁もあつたでしょうか。直虎は上田藩六万石、松平忠固の娘・俊を正室に迎え入れます。直虎二十九歳の年でした。



時代は更なる動乱へ。京都の治安維持と將軍徳川家茂の守護のため、新撰組が京都に送り込まれ暗躍。多くの仲間を殺された長州藩は幕府と対立。幕府対長州藩・薩摩藩の構図で、国内での争いが激しさを増す中、將軍家茂が急死。一橋家から徳川慶喜が十五代將軍となりました。

こうした国内の争いにより、時代の先駆者は危険にさらされ、実際に、佐久間象山は長州藩の浪士に、赤松小三郎は薩摩藩の手により暗殺され、直虎は偉大な恩師二人を失うこととなりました。

直虎「国同士で争って何になる！ 新しく強い国づくりの為に、もっと大きな志を持つべきではないのか！」

国外からの脅威が間近に迫る中、長州藩や薩摩藩の有り方に、疑問を覚える直虎でした。

慶応三年・一八六七年十月、幕府対長州・薩摩の、この状況を打開する策「大政奉還」が、徳川慶喜によって朝廷に申し立てられました。

「大政奉還」は、これまで幕府が握っていた政権を朝廷に返上し、旧幕府・徳川家が朝廷による政治の配下に入ることを示すものではありませんが、朝廷のもとに各藩がまとまることで戦乱は終結し、徳川家も存続できる、そればかりでなく、徳川家がこれまで政権をとっていた実績により、新たな政権において中心的役割を担う可能性も備えた、幕府にとっての妙案でした。

この年の十二月、直虎は幕府の要職、若年寄兼外国物奉行に任命されます。既に政権が朝廷に返上された中で、須坂藩開藩以来、藩として恩義を受けた幕府に対し、最後まで仕える気持ちだったと言われています。

しかし、大政奉還後間もない慶応四年・一八六八年一月、戦乱は終結することなく、幕末最後の決戦「鳥羽・伏見の戦い」が勃発します。徳川家が大きな力を持つたまま存続することを危惧した長州・薩摩側は、徹底的に幕府・徳川家を弱体化させることとしたのです。

幕府側にあった諸藩は、「薩長を許すな」「將軍を守るぞ」と最後の一兵になるまで戦う覚悟で戦いました。ところが、幕府側の総大将である將軍慶喜はこの戦いの中、自ら出陣すると偽り、江戸へ逃亡。士気が下がった旧幕府軍は敗退。この戦い以後、幕府組織は解体の一途をたどることになりました。



直虎「逃げるとは、いったい：慶喜公は何を考えておられるのか、何を望んでおられるのだ：」

輪をかけるかのように、悲運ひうんが続きました。同じ志で改革を語った無二の親友・山内豊福が、夫人と共に自刃じじんしたとの知らせが届いたのです。

一方、江戸城では連日、大評定だいひょうじょうによる話し合いが続きました。

諸侯「徳川家を守る！」

諸侯「その前に外国勢の阻止そし！」

諸侯「いや：江戸町民の安全が第一！」

大政奉還が行われてから続いて来た評議ひょうぎですが、侃侃諤諤かんかんがくがくと言い合いが続くばかりで、慶喜はそれを黙って聞くのみ。

直虎「何と滑稽こっけいな有様ありさまだ：これが忠誠ちゅうせいを誓ちかった徳川將軍家の姿か：」

内心に悔しさを嘔かみしめ、直虎はどうとう声を上げます。

直虎「恐れながら、將軍家に申しあげます！：今日までの評定は何一つ決まっておりません。將軍家は一体どのように致いたすのか：今後の徳川幕府の有り方を含め、ご示唆しそ頂きたい」

慶喜「無礼な！」

直虎「無礼はもとより承知しょうちでございます。しかし、これだけは申し述べておかな

ければなりません！我ら仕えてきた大名家はどのようにすればよいか。絶対ぜったい恭順きょうじゆんならばそう決して下さい。我ら、この大評定の結論として従いましょう。鳥羽・伏見の戦い惨敗さんぱいの責任の取り方も考慮こうりよし、ご返答をいただきたい！」



直虎が將軍慶喜に何を言ったかは、明確にはわかっていません。

諸侯「あそこまで將軍家を叱責しっせきした大名は、徳川幕府には誰一人としていません。まさに武士の鑑かがみだ。」

諸侯「叱しかられた慶喜公は、一言も返せなかったではないか！」

同意の声が多く聞かれる中、直虎は黙って静かに大広間を後にし、それが直虎の最後の姿となりました。

慶応四年・一八六八年、一月十七日、堀直虎公、江戸城中で自害じがい。



歴史の齒車は無情にも直虎の命を奪いましたが、武士として育ち、武士として幕末を生きた彼は、最後まで「義」を貫き通したのです。

直虎 「母上殿。父上の教えをこんな形でしか貫き通せなかった私をお許し下さい。

鳥羽・伏見の戦いに自分の部下を置き去りにして平気で逃げ帰る、そんな慶喜公にどう尽くせば良かったのでしょうか。…生きる明かりが消えてしまったのです…。母上、私は間違っていたのでしょうか？」

死をもって主君を叱責する「諫死」という選択をした直虎、自身の行為を省みる直虎に、母は微笑みます。

母 「いいえ、あなたの命と引きかえに…須坂の民を新しい国づくりに導いたのです。須坂の民は、決してあなたの死を無駄にはしないでしよう。あなたは父上の教え通り、最後まで江戸幕府に尽くしました。あっぱれな須坂藩主ですよ。父上の愛した、あの満開の桜そのものです。見事な散りぎわでした…。

母は誇りに思いますよ。」



直虎の死後五十六年後の大正十三年、宮内省から直虎に「従四位」が贈られ、朝廷に対する忠節が顕彰されました。

直虎は旧須坂藩士らにより大切に弔われ、臥竜山の霊廟に祀られています。

〔終わり〕

【原作】『將軍慶喜を叱った男 堀直虎』江宮隆之著（祥伝社）

漫画『信州須坂藩 堀直虎物語』制作・ホクシンハウス

【著作】南澤汎山、南澤雅尚

【発行】須坂市立博物館 平成30年4月



## 須坂市立博物館

長野県須坂市臥竜二丁目4番1号 TEL 026-245-0407 FAX 026-214-5548

この冊子は 1,500 部作製し、一部あたりの単価は 76 円です。

**R100**